

# 妊婦の夫婦関係と精神的ストレスに関する研究 —夫のワーク・ライフ・バランスと妻の就労の視点から—

尾形 和男

学校教育講座

## A Study on the Pregnant Wife's Marital Relationship and Mental Stress —From the View Point of Husband's Work-Life Balance and Wife's Occupation—

Kazuo OGATA

*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 問題と目的

ワーク・ライフ・バランスは家庭と職業とのバランスを取ることで、生活の質そのものを向上させようとする考えである。

ワーク・ライフ・バランスに関する研究は、夫の子育てへの参画の必要性が求められるようになってから取り組まれてきている。その内容の多くは、我が国では妻への育児・家事の負担が多く存在する一方で、夫は仕事への関わりが強く存在し、いわゆる役割分業体制への批判や見直しに基づいているものである。その内容の多くは、妻が育児・家事・仕事をこなすという多重役割から生ずる母親の精神的・肉体的負担を軽減するために父親の家庭関与の必要性を訴え、子どもの発達・適応に及ぼす影響を指摘している（例えば、柏木・若松, 1994; Lieberman, Doyle & Markiewicz, 1999; Kitzmann, 2000; 尾形, 1995; 尾形・宮下, 2000; 菅原ら, 2002; 加藤, 2004; 尾形・宮下・福田, 2005; 青木・岩立, 2005）。

これらの先行研究は、生活の質を向上させるための、ワーク・ライフ・バランスの基本的な考え方としての、家庭と仕事の両方への関与を視点に明確に置いた研究とは必ずしもいえない点が指摘できる。

このような状況の中で、ワーク・ライフ・バランスのもたらす影響として家族成員のストレスとの関連性を取り上げた研究がみられる。例えば、企業に勤める女性のストレスについて検討した研究（金井, 1993; 金井, 2006）、大学生を持つ父親のワーク・ライフ・バランスと家族成員の生活環境の問題を取り上げた研究（尾形, 2010）、男性の仕事と育児の両立を検討した加藤（2004）などが指摘できる。また、Innstrand, Langballe, Espenes, Falkum & Aasland（2008）は、家

庭と仕事との関わりから生じるワーク・ファミリー・コンフリクトについて職種別の検討を加えている。さらに、Darcy & McCarthy（2007）は、ライフステージの視点から就学前児童から13歳までの子どもを育てている親のストレスを検討し、就学前児童の場合にワーク・ファミリー・コンフリクトが一番大きく、ストレスも大きいことを示している。これは、幼い子どもの子育てと家庭と仕事の両立の難しさを示唆するものであるが、ライフステージのより早い段階である妊娠期ではさらに別の問題が指摘されている。

妊娠期は妊婦の身体的変動と同時に、それに伴う精神的な変化も生じ、不安定なことが多い時期でもある（Robinson & Barret, 1986; 三澤・片桐・小松・藤沢, 2004）。これは、Innstrand, Langballe, Espenes, Falkum & Aasland（2008）の指摘する、就学前児童を育てている家庭のストレスとは異なる面を持つと考えられる。その多くは妻自身が身体的健康を維持することと同時に、生まれてくる子どものことを常に気遣うからである。したがって、夫としては精神的な支えとして妻に接することも求められる。基本的には、妊婦の精神的安定を図るための関わりが求められるのであり、そのことがさらには夫婦関係をより強いものにするのが指摘されている（Belsky, Crnic & Gable, 1995; 中島・常磐, 2008; 平山・秋山, 2004）。しかし、実際問題として、仕事に携わっている夫も忙しい生活をしており、ストレスを溜めていることも十分にあることであり、妊婦への援助は比較的大変なことである。

また、この時期妊娠期間によっては妊婦も仕事に就いていることもあり、仕事と家庭の両立は大変ストレスの溜まるものであると考えられる。さらに、出産の経験もストレスを左右すると考えられる。妊娠期は、自己の身体的不安定さ、生まれてくる子どもへの期待

と不安など、精神的・肉体的にも負担の大きな時期であり、妊婦の仕事と家庭への関わりには大きな影響を与えると考えられる。岩田(2003)は、初産婦は経産婦以上に精神的な支えを必要とするとしている。このことは、初産婦という極めてストレスの溜まりやすい、極めて不安定な状況に直面する問題を提起している。したがって、妊娠期のライフステージの段階の就労は妊婦にとって生活上大きな影響力をもつと考えられる。これに関して、阿南・椎葉・柴田・川本(2010)は文献調査から就労妊婦の妊娠中の労働による母胎や出生児への健康問題を調べ、就労妊婦は高率に異常を認めるとする報告が多いことを指摘している。同様に、伊藤(2003)は、就労妊婦の妊娠・分娩異常に関して、就労と流産、早産、妊娠中毒症、低体重児の出生との関連性を指摘している。その因果関係については更に研究が求められるとしているが、注目されるべき指摘である。妊婦の就労の問題はワーク・ライフ・バランスの考えが注目されるようになってから、改めて注目されるようになり、今日に至っているが、それでも依然として対策は進んでいないのが現状である。出産の経験の有無、また就労の有無など妊婦のワーク・ライフ・バランスがストレスに及ぼす要因をさらに検討することが必要である。

ワーク・ライフ・バランスは生活の質を上げるのが大きな目的であるが、それは夫婦関係のあり方に直結する問題でもある。

ワーク・ライフ・バランスの視点から、夫と妻の夫婦のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係に焦点を当てた研究は少ない。しかし、その中でもStreich, Casper, & Salvaggio(2008)は、共働き家庭を対象として仕事が家族に干渉する程度を測定する尺度(WIF)を用い、妻の夫についてのWIFと夫自身のWIFの評定が一致する場合の方が、妻が自分の家庭や仕事を主とする生活の状況と妻のWIFの関係を和らげることを示している。つまり、夫の仕事による家庭への影響について、妻が夫と共有した認識を持つことが妻の良好な家庭生活を支えると言うことを指摘している。このことは、夫のワーク・ライフ・バランスについて夫婦がコミュニケーションに基づく共通認識を持つことが妻の家庭生活に重要な役割を持つことを示しているものであり、ワーク・ライフ・バランスについて夫婦の共通した認識が不可欠であるとした大変示唆に富む報告である。また、これと関連して山口(2007)は、夫のワーク・ライフ・バランスが妻の夫婦関係満足度に及ぼす影響について検討し、ワーク・ライフ・バランスを送る夫婦のコミュニケーションが夫婦の満足度とその後のワーク・ライフ・バランスに及ぼす影響力の重要性を示している。同様に尾形(2010)も、夫のワーク・ライフ・バランスのあり方が夫婦関係満足度に及ぼす影響について大学生の家庭を対象として分析を加

え、夫が家庭を中心とする関わりと仕事への関わりが高い場合に夫婦関係満足度が高いことを明らかにしている。

以上のように、ワーク・ライフ・バランスは、そのあり方によって、夫婦関係、家族成員のストレスにまで影響を及ぼすことが指摘できる。したがって本研究では、妊娠期に焦点を当てて次のことを検証することを目的とする。

1. 夫のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係と妻のストレスに影響を及ぼす。また、家族機能形成にも影響を及ぼす。

2. 妊婦の就労と妊娠経験が妊婦のストレス、夫婦関係、家族機能形成にも影響を及ぼす。

以上の視点から、妊娠期の妊婦のストレス、夫婦関係、家族機能について、夫のワーク・ライフ・バランスの状況と妻の妊娠の経験と就労状況との関係から検討する。

## 方法

### 1. 調査対象者

愛知県在住の妊婦とその家庭(父親と母親)124世帯。初産婦55世帯((1)職業:夫<会社員47名, 教員2名, 公務員1名, 自営業1名, その他4名>, 妻<会社員14名, 教員2名, 公務員2名, 自営業2名, パートタイム11名, 専業主婦22名, その他4名>)。経産婦69世帯((1)職業:夫<会社員54名, 教員2名, 自営業5名, その他8名>, 妻<会社員9名, 教員9名, パートタイム1名, 専業主婦50名>)。(2)子どもの人数:1人52世帯, 2人13世帯, 3人2世帯, 不明2世帯。(3)子どもの性別:男児40名, 女児24名, 不明5名。(4)子どもの平均月齢45.80ヶ月)。

### 2. 調査用紙

妻用:1. ①夫・妻の職業 ②家族構成 ③子どもの年齢と性別を問う質問紙。2. 妻のワーク・ライフ・バランスを調べる調査用紙[尾形(2010)を参考に作成]。3. 夫婦関係を調べる調査用紙[諸井(1997)を参考に作成]。4. 妻のストレスを調べる調査用紙[清水・今栄(1981)]。5. 子どものストレスを調べる調査用紙[清水・今栄(1981)]。6. 妻の子どもの過ごし方について問う質問紙[林・岡本(2005)]。

夫用:1. 夫のワーク・ライフ・バランスを調べる調査用紙[尾形(2010)を参考に作成]。2. 夫婦関係を調べる調査用紙[諸井(1997)を参考に作成]。3. 家族機能を調べる調査用紙[渡辺(1989)]。4. 夫のストレスについて調べる調査用紙[清水・今栄(1981)]。

妻用、夫用に別々に冊子にして封筒に入れ、アンケートを受けてくれる妊婦またはその夫に趣旨説明の後にアンケートの説明をし、配布した。各家庭で夫と

妻別々に記入していただいたものをまとめてもらい、同封の封筒で郵送により回収した。

### 3. 調査時期

2011年9月～2012年5月。

## 結果

### 1. 質問紙の構造化

夫のワーク・ライフ・バランスの構造化を図るために因子分析（主因子法, *promax* 回転）を実施し、「仕事関与」「余暇時間の活用」「家庭関与」「地域交流」の4因子（それぞれ $\alpha = .793, .794, .708, .680$ ）抽出した（Table 1）。次に、夫婦相互の認知に基づく夫婦関係の構造化を図るために、夫と妻別に因子分析（主因子法, *promax* 回転）を実施した。その結果、夫については「相互の信頼感」「相互理解」「相手への要望」「相互のコミュニケーション」の4因子（それぞれ $\alpha = .927, .830, .750, .733$ （Table 2））、妻については「相互の信頼感」「相互のコミュニケーション」「相手への要望」の3因子が抽出された（それぞれ $\alpha = .925, .816,$

667）。また、家族機能については「結合性」（①私の家族では、お互いに助け合ったり元気づけあうことがよくある ②私の家族は一体感を持っている ③私の家族は一緒に何かをすることが多い ④家族はお互いに仲良く暮らしている ⑤家族は、家にいるとお互いを避けているように感じる〈逆転項目〉）、「表現性」（①家族のみんなは、思ったことを自由に話す ②何か問題が起こっても、家族で話し合ってみんなで解決策を見出す ③家族でいろいろな問題を話し合い、その結論や解決策にみんなで賛同できるようにする ④私の家族では、みんなが自分の意見を表現することを大事にしている ⑤私たちは、個人の抱えている問題について、お互いに話すことが多い）、「権威的」（①私の家族では、親が重要な決定をすることがある ②私の家族では、規則を破ると厳しく罰する ③家族のメンバーは、何か悪いことをすると罰せられる ④私の家族では、規則が多い方である ⑤私の家族ではあれこれ命令することはない〈逆転項目〉）、「民主的」（①家族のメンバーは、生活の決まりを共に作ってきた ②家族のメンバーは、問題解決にあたって、意見を出して解決しようとする ③私の家族では、何かを決める

Table 1 夫のワーク・ライフ・バランス (*Promax* 回転後)

項目	I	II	III	IV
〈仕事関与 $\alpha = .793$ 〉				
11. 私は仕事が順調なとき、家族とよく話をする	<b>.892</b>	-.041	.012	-.023
12. 私は仕事がうまく行っているときは、表情に出やすい	<b>.673</b>	.071	.096	.064
9. 私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている	<b>.622</b>	-.041	-.030	-.096
8. 私は家族と話をするとき、仕事のことが多い	<b>.603</b>	.091	-.088	.041
13. 私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う	<b>.527</b>	-.043	.177	.203
10. 私は休暇の時でも仕事のことが頭から離れないことがある	<b>.486</b>	-.042	-.136	-.075
〈余暇時間の活用 $\alpha = .794$ 〉				
14. 私時間があるときは、自分の趣味を行うことがある	-.002	<b>.793</b>	.043	.051
20. 時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う	.102	<b>.719</b>	.093	-.166
15. 日曜日などは自分の時間を作って楽しむ	-.032	<b>.718</b>	-.127	.185
21. 自分の趣味など時間をとってゆっくりと楽しむのが好きだ	-.076	<b>.718</b>	.169	-.031
6. 私は休暇の時、家族とかかわらず、一人でのんびりしていることがある	.038	<b>.446</b>	-.328	.076
〈家庭関与 $\alpha = .708$ 〉				
1. 私は休暇のとき、妻と一緒にいる時間を大切にしている	.105	-.012	<b>.623</b>	-.191
3. 私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある	.041	.063	<b>.601</b>	.021
2. 私は家族で食事をするとき、仕事のことでなくいろいろな話をしている	-.066	.073	<b>.591</b>	-.082
* 5. 私は忙しくて家族との会話は少ない	.189	.117	<b>-.532</b>	-.224
4. 私は子どもの将来のことについてよく相談にのる	.079	-.113	<b>.529</b>	.180
19. 時間を作って妻と旅行などに行きたいと思う	-.071	.274	<b>.444</b>	-.090
〈地域交流 $\alpha = .680$ 〉				
16. 町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい	.046	.031	.034	<b>.747</b>
22. 休日など地域との関わりが多い方だ	-.018	.089	-.072	<b>.634</b>
* 17. 町会など近隣の仕事に関わるのはおっくうである	.012	.036	-.012	<b>-.530</b>
因子相関	I			
	II	.158		
	III	-.015	-.015	
	IV	.162	-.029	-.017

(\*は逆転項目を示す)

Table 2 夫の見る夫婦関係 (Promax回転後)

項 目	I	II	III	IV
〈相互の信頼感 $\alpha = .927$ 〉				
7. 私と妻の関係は、非常に安定している	<b>.946</b>	-.067	.008	.026
9. 妻との関係によって、私は幸福である	<b>.880</b>	.068	-.075	-.111
11. 私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	<b>.816</b>	.140	-.021	-.085
8. 私たちの夫婦関係は強固である	<b>.769</b>	-.089	.026	.095
5. 私は妻から受け入れられている	<b>.682</b>	-.046	.088	.053
20. 私は妻とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい	<b>.634</b>	-.112	.004	.090
10. 私は、まるで自分と妻が同じチームの一員のようにであると、本当に感じている	<b>.629</b>	.053	.009	.165
6. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている	<b>.596</b>	.166	-.083	.043
19. 私は妻を尊敬している	<b>.499</b>	.362	.072	-.013
〈相互理解 $\alpha = .830$ 〉				
12. 妻は夫婦の会話を大事にしている	.200	<b>.744</b>	-.063	-.042
13. 夫婦でお互いを思いやっている	.261	<b>.690</b>	-.024	-.102
14. 私が悩んでいるとき妻は相談相手になってくれる	.054	<b>.675</b>	-.005	.055
1. 私は妻と納得のいくまで話をする事ができる	-.142	<b>.632</b>	.145	.060
〈相手への要望 $\alpha = .750$ 〉				
17. 妻には私の話をよく聞いてほしい	.115	-.169	<b>.768</b>	.098
16. 妻には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい	.199	.049	<b>.696</b>	-.006
15. 妻には私の考えを受け入れて尊重してほしい	-.235	.276	<b>.651</b>	-.031
18. 妻には子どもに今まで以上に関わりを持ってほしい	-.067	-.004	<b>.538</b>	-.144
〈相互のコミュニケーション $\alpha = .733$ 〉				
3. 私は妻とは何でも話ができる	-.043	.139	-.038	<b>.896</b>
2. 妻にはいろいろ話ができる	.033	.267	-.030	<b>.665</b>
* 4. 妻には頼みたいことがあっても何となく言い出しにくい	.200	-.192	-.011	<b>.487</b>
因子相関				
	I			
	II	0.68		
	III	.178	.319	
	IV	.556	.617	.183

(\*は逆転項目を示す)

Table 3 妻の見る夫婦関係 (Promax回転後)

項 目	I	II	III
〈相互の信頼感 $\alpha = .925$ 〉			
8. 私たちの夫婦関係は強固である	<b>.959</b>	-.093	.028
6. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている	<b>.928</b>	-.097	-.015
7. 私と妻の関係は、非常に安定している	<b>.831</b>	.121	-.065
9. 妻との関係によって、私は幸福である	<b>.755</b>	.166	-.103
5. 私は妻から受け入れられている	<b>.748</b>	-.195	.131
13. 夫婦でお互いを思いやっている	<b>.698</b>	.176	.043
11. 私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	<b>.655</b>	.232	-.023
10. 私は、まるで自分と妻が同じチームの一員のようにであると、本当に感じている	<b>.425</b>	.356	-.004
* 4. 妻には頼みたいことがあっても何となく言い出しにくい	<b>.399</b>	.114	.070
〈相互のコミュニケーション $\alpha = .816$ 〉			
1. 私は妻と納得のいくまで話をする事ができる	-.249	<b>.801</b>	.143
14. 私が悩んでいるとき妻は相談相手になってくれる	.135	<b>.720</b>	-.016
12. 妻は夫婦の会話を大事にしている	.234	<b>.673</b>	-.049
19. 私は妻を尊敬している	.205	<b>.568</b>	-.086
20. 私は妻とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい	.205	<b>.517</b>	.127
〈相手への要望 $\alpha = .667$ 〉			
16. 妻には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい	.177	-.157	<b>.757</b>
15. 妻には私の考えを受け入れて尊重してほしい	-.185	.270	<b>.534</b>
17. 妻には私の話をよく聞いてほしい	.170	.155	<b>.411</b>
因子相関			
	I		
	II	.725	
	III	.225	.202

(\*は逆転項目を示す)

ときみんなが一言でも発言できる ④私の家族では、約束を守らなかった時の対処の方法を一緒に考えてきた ⑤私の家族では、大切なことを決定する前に、親が子どもの理解を得るようにしている), の4機能を用いたが、 $\alpha$ 係数はそれぞれ順に.764, .888, .755, .732であった。

さらに、妻・夫・子のストレスについても因子分析(主因子法, *promax*回転)を実施したが、妻と夫については「不安感」と「圧迫感」の各因子が抽出された。 $\alpha$ 係数は夫の「不安感」が.879, 「圧迫感」が.876であった。妻については「圧迫感」が.852, 「不安感」が.818であり高い信頼性が確認された (Table 4, Table 5)。

Table 4 妻のストレス (*Promax*回転後)

項 目	I	II
〈圧迫感 $\alpha = .852$ 〉		
15. 実際にはたいしたこともないことが気になってしかたがない	.918	-.086
18. 私はささいなことに思いわずらうことがある	.730	-.014
16. 私は物事を難しく考える傾向がある	.701	.024
14. 私は困難なことが重なると圧倒されてしまう	.683	-.148
10. 私は心配事が多い	.634	.201
19. 私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない	.615	.096
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい	.573	-.154
20. 身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する	.553	.147
〈不安感 $\alpha = .818$ 〉		
* 9. 私はリラックスしている	-.053	-.678
8. 私はなにかしら緊張している	.275	.659
7. 私はイライラしている	-.023	.641
* 2. 私は安心している	.026	-.637
4. 私は不安である	.184	.618
* 1. 私は平静である	.000	-.602
6. 私はピリピリしている	-.035	.598
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である	.093	.563
因子相関	I II	.367

(\*は逆転項目を示す)

Table 5 夫のストレス (*Promax*回転後)

項 目	I	II
〈不安感 $\alpha = .879$ 〉		
6. 私はピリピリしている	.886	-.115
7. 私はイライラしている	.833	-.095
* 5. 私は気分がよい	-.730	.257
* 2. 私は安心している	-.710	-.003
* 9. 私はリラックスしている	-.582	-.072
* 1. 私は平静である	-.538	-.062
8. 私は何かしら緊張している	.535	.229
3. 私は何かまずいことが起こりそうで心配である	.533	.163
4. 私は不安である	.474	.268
〈圧迫感 $\alpha = .876$ 〉		
16. 私は物事を難しく考える傾向がある	-.023	.775
15. 実際には大したこともないことが気になってしかたがない	.117	.764
14. 私は困難なことが重なると圧倒されてしまう	.077	.720
18. 私はささいなことに思いわずらうことがある	.065	.697
13. 私はすぐに決心がつかず迷いやすい	-.101	.696
17. 私はやっかいなことは避けて通ろうとする	-.447	.650
20. 身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する	.286	.568
19. 私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない	.270	.477
因子相関	I II	.543

(\*は逆転項目を示す)

一方、父親のワーク・ライフ・バランスの各因子間  
にどの様な関連性が存在するのかを分析するために、  
各因子の下位尺度得点を基にして、階層的クラスタ分  
析（ウォード法）を行った。結合距離（ユークリッド  
距離）10～15において3クラスタに分類され、それぞ  
れぞれ次のようになった。

I：仕事への関与高・余暇活動高・家庭関与低・地域  
交流中（46名）

II：仕事への関与低・余暇活動低・家庭関与低・地域  
交流低（28名）

III：仕事への関与中・余暇活動中・家庭関与高・地域  
交流高（50名）

クラスタ I は「仕事中心型」、クラスタ II は「低活動  
型」、クラスタ III は「家庭中心型」とした。

## 2. 夫のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係、家族機 能、夫婦のストレスとの関連性

夫のワーク・ライフ・バランスが家族にどの様な影  
響をもたらしているのかを明らかにするために、各因  
子の下位尺度得点を算出した。そして、ワーク・ライ  
フ・バランスの3つのクラスタを独立変数、夫婦関係、  
家族成員のストレス、家族機能を従属変数として、一  
元配置分散分析を行った。各変数に有意差が見られ  
る場合には多重比較（Tukey法）を行った。ここでは、  
初産婦（55名）と経産婦（69名）別々に分析を加えた。  
その結果を Table 6 に示した。有意な結果は多くは得  
られなかったものの、次の結果が得られた。

初産婦については、夫の見る夫婦関係において「相  
互理解」でクラスタ I・クラスタ III > クラスタ II であっ

た。また経産婦では、妻のストレス「圧迫感」におい  
てはクラスタ II > クラスタ III が示された。

この結果から、初産婦家庭では夫が仕事か、家庭に  
関与している場合に夫婦相互の理解が得られていると  
認知していること、経産婦家庭においては夫が仕事、  
家庭ともに関わらない場合に妻のストレスが大きいこ  
とが示された（Table 6）。

## 3. 妻のストレスと妊娠・就労状況との関連性

次に、妊婦の就労状況と妊娠の経験が妊婦のスト  
レスにどのような影響をもたらすのかを検討するた  
めに、妻の就労状況と妊娠の経験（初産婦・経産婦）を  
従属変数とする一元配置分散分析を実施した（Table  
7）。

ここでは、就労状況については有職者（会社員・教  
員・公務員・パートタイム・その他）と無職（専業主  
婦）として分類した。

その結果、夫の見る夫婦関係において「相手への要  
望」において有意な効果が見られた。多重比較（Tukey  
法）の結果、「初産婦×有職者」が、「経産婦×無職者」  
よりも有意に高いことが示された。また妻の見る夫婦  
関係においては「相互のコミュニケーション」におい  
て有意な効果が確認された。多重比較の結果、「初産婦  
×無職」の場合が「経産婦×無職」よりも高い傾向が  
あることが示された。

妻のストレスについては「圧迫感」で有意な効果が  
見られ、多重比較の結果、「初産婦×無職」の場合が  
「初産婦×有職」「経産婦×無職」よりも高いことが確  
認された。さらに、家族機能についても「権威的」に

Table 6 クラスタ別に見た初産婦と経産婦の夫婦関係・家族成員のストレスと家族機能に及ぼす影響

		初産婦 (55名)			多重比較	F 値	経産婦 (69名)			多重比較	F 値
		クラスタ I 24名 M (SD)	クラスタ II 9名 M (SD)	クラスタ III 22名 M (SD)			クラスタ I 22名 M (SD)	クラスタ II 20名 M (SD)	クラスタ III 27名 M (SD)		
夫の見る 夫婦関係	相互の信頼	4.31 (.80)	4.35 (.56)	4.45 (.48)		.291	4.33 (.64)	4.21 (.74)	4.27 (.62)		.158
	相互理解	4.27 (.59)	3.64 (1.01)	4.41 (.53)	I, III > II*	4.61*	4.02 (.84)	3.92 (.76)	4.04 (.83)		.126
	相手への要望	4.14 (.58)	3.63 (.47)	3.85 (.72)		2.53†	3.55 (.57)	3.26 (.98)	3.62 (.97)		.996
	相互のコミュニ ケーション	3.82 (.53)	3.74 (.52)	3.80 (.48)		.079	3.65 (.50)	3.70 (.71)	3.59 (.43)		.229
妻の見る 夫婦関係	相互の信頼	4.12 (.49)	4.02 (.46)	4.08 (.44)		.176	4.03 (.64)	3.89 (.66)	3.92 (.69)		.254
	相互のコミュニ ケーション	4.47 (.47)	4.16 (.42)	4.26 (.39)		2.16	4.06 (.69)	3.92 (.90)	4.00 (.76)		.164
	相手への要望	4.28 (.59)	3.81 (.71)	3.97 (.74)		2.02	3.87 (.64)	3.52 (1.07)	3.80 (.96)		.815
夫のストレス	不安感	2.39 (.86)	2.22 (.68)	2.34 (.66)		.159	2.56 (.84)	2.37 (.599)	2.26 (.54)		1.15
	圧迫感	2.83 (1.0)	2.72 (.61)	2.67 (.81)		.190	2.92 (.71)	2.57 (.70)	2.63 (.81)		1.30
妻のストレス	圧迫感	3.30 (.71)	3.22 (.85)	3.27 (.82)		.020	3.15 (.77)	3.42 (.83)	2.74 (.77)	II > III*	4.36*
	不安感	2.80 (.32)	2.92 (.63)	2.80 (.32)		.282	2.83 (.49)	2.87 (.43)	2.76 (.36)		.385
家族機能	結合性	4.38 (.47)	4.22 (.52)	4.42 (.54)		.480	4.32 (.77)	4.25 (.68)	4.24 (.47)		.104
	表現性	4.10 (.59)	3.73 (.65)	3.91 (.66)		1.18	4.07 (.64)	3.93 (.75)	4.08 (.57)		.362
	権威的	2.52 (.87)	2.47 (.78)	2.76 (.68)		.697	2.58 (.81)	2.51 (.80)	2.70 (.78)		.337
	民主的	3.48 (.73)	3.16 (.61)	3.48 (.68)		.814	3.15 (.77)	3.51 (.71)	3.52 (.72)		1.73

\* $p < .05$  † $p < .10$

Table 7 初産婦と経産婦の就労状況が夫婦関係, ストレス, 家族機能に及ぼす影響

		初産婦×無職 (A)		初産婦×有職 (B)		経産婦×無職 (C)		経産婦×有職 (D)		多重比較	F値
		M (SD)	N	M (SD)	N	M (SD)	N	M (SD)	N		
夫の見る 夫婦関係	相互の信頼感	4.25 (.85)	22	4.45 (.46)	33	4.30 (.66)	50	4.20 (.63)	19		.792
	相互理解	4.26 (.67)	22	4.20 (.71)	33	4.07 (.83)	50	3.83 (.67)	19		1.37
	相手への要望	3.86 (.45)	22	4.00 (.75)	33	3.42 (.88)	50	3.71 (.77)	19	B>C*	4.29**
	相互のコミュニケーション	3.79 (.80)	22	3.81 (.51)	33	3.66 (.53)	50	3.57 (.56)	19		1.19
妻の見る 夫婦関係	相互の信頼感	4.06 (.52)	22	4.11 (.42)	33	3.95 (.69)	50	3.96 (.55)	19		.634
	相互のコミュニケーション	4.40 (.40)	22	4.29 (.47)	33	4.00 (.80)	50	4.02 (.66)	19	A>C†	2.77*
	相手への要望	4.06 (.53)	22	4.09 (.78)	33	3.68 (.95)	50	3.89 (.74)	19		2.11
夫のストレス	不安感	2.26 (.79)	22	2.39 (.71)	33	2.33 (.72)	50	2.46 (.54)	19		.343
	圧迫感	2.86 (.98)	22	2.67 (.78)	33	2.73 (.75)	50	2.57 (.80)	19		.505
妻のストレス	圧迫感	3.69 (.62)	22	2.98 (.72)	32	2.92 (.79)	50	3.31 (.81)	19	A>B, C*	6.39***
	不安感	2.88 (.35)	22	2.87 (.46)	31	2.95 (.79)	50	3.41 (.82)	19		.843
家族機能	結合性	4.46 (.50)	21	4.31 (.50)	32	4.33 (.62)	50	4.13 (.63)	19		1.12
	表現性	4.11 (.70)	21	3.86 (.57)	32	4.13 (.59)	50	3.80 (.73)	19		2.11
	権威的	2.23 (.66)	21	2.85 (.76)	32	2.64 (.74)	50	2.55 (.90)	19	A<B*	2.99*
	民主的	3.50 (.77)	21	3.37 (.63)	32	3.50 (.78)	50	3.41 (.71)	19		.548

\* $p<.05$  † $p<.10$

において有意な効果が確認され、多重比較の結果「初産婦×有職」が「初産婦×無職」よりも高いことが示された。

### 考察

妊娠期の夫婦について、夫のワーク・ライフ・バランスが妻のストレスに及ぼす影響について分析を加えたが、結果の順に考察を加える。

まず、夫のワーク・ライフ・バランスとして3クラスを抽出し、クラスを独立変数、夫婦関係、妻のストレス、家族機能を従属変数として、クラスごとの状況について見たが、初産婦家庭の場合、夫の見る夫婦関係の「相互理解」はクラスⅠ、クラスⅢにおいて有意に高いことが示された。クラスⅠは夫の仕事と余暇時間の活用度が高いが家庭関与は低く、夫自身は仕事中心の生活をしていると認知しており、仕事が生が夫婦関係の中核としての位置づけがあるとも考えられる。したがって、仕事への関わりが夫婦関係を左右するという傾向が強いものと考えられるが、このような感覚は夫婦の役割分担意識が根強く残っていることを示すものであろうか。夫として、仕事が生が自己の役割であると認識している場合に、仕事に関わるほど家族への貢献が高いと感じ、夫婦間の理解も深まっていると感じているのであろうか。また、クラスⅢは仕事関与がある程度高く、家庭関与と地域交流が高く家庭関与を主とする家庭である。この場合は家庭関与に重点を置くために家族との関わりも高いと推測されるが、妻の見る夫婦関係と対比させてみると、妻の場合には3つのクラスにおいては有意な差は見られない。つまり、夫のワーク・ライフ・バランスは直接

的には妊婦である妻の見る夫婦関係には影響しないようである。この結果は、夫としての認知の仕方が妻と異なることを示しているのであるが、仕事や家庭への関与が高いと意識している男性の場合に、夫婦関係の状況をより敏感に意識していると言うことを示していると考えられる。

また、妻のストレスに関しては、経産婦においてクラスⅡがクラスⅢよりも有意に高いことが示されている。夫の仕事も家庭関与も低い群は、家庭関与中心のワーク・ライフ・バランスを送っている家庭以上に妻のストレスが溜まりやすいことが示されているのであるが、家庭関与も仕事関与も低い夫の場合、夫の生き方そのものが消極的であり、家庭との関係にも何らかの問題があると推測される。その問題の一つとして、夫婦間のコミュニケーションの欠如などが指摘できよう。しかし、生活状況についてより具体的な分析が求められる。さらに、経産婦の場合、第1子出産後の子育てを中心とする夫婦関係のあり方がその後の夫婦関係のあり方そのものに影響すると同時に、その後に生まれた子どもの子育てにもさらに影響しているとも考えられる。したがって、第1子出産後の夫婦関係の状況も含めた縦断的な分析検討が求められると考えられる。

さらに、詳細な検討を進めるために、妊娠経験と就労状況に基づいた分析を行ったが、初産婦で専業主婦の場合、妻の見る夫婦関係において「相互のコミュニケーション」が高い反面、ストレスについては「圧迫感」が一番高いということも示され、夫婦関係を良好に見る反面、家庭での閉鎖的環境の中でストレスを溜めやすく、非常に不安定な環境での生活を送っていることが示されている。また、夫の見る夫婦関係におい

では、「相手への要望」に関して有職者で初産婦の家庭は専業主婦の経産婦家庭よりも高く、概して初産婦家庭に高いことも示されており予想外の結果であった。妊娠期は妻の状況から考えれば、相対的に心の安定と身体が求められるが、夫としての妻が妊娠していることに対する受け止め方に妻との間にずれが存在するとも考えられる。つまり、妻は「相互のコミュニケーション」が取れていると感じている反面、男性は必ずしもそうではないことを示しているとも考えられる。男性は相手に要求し、女性はその中に「相互のコミュニケーション」を感じているというような、男性と女性の認知のずれが存在していることも推測される。このことについては、家族機能形成の場合にも指摘できると考えられる。つまり、「権威的」な家族機能は有職者で初産婦の家庭で高くなっており、同様に夫の意識のずれの存在が考えられる。

妊娠期というライフステージにおいて女性にかかる心身の負担が相対的に大きな時期において、男性としての、夫としての役割についての認識が相対的に、「男性は仕事、女性は家事・育児」という伝統的な役割分担意識が、根強く存在していることが結果として現れていると考えられる。

妊娠期は、夫婦の二人だけの生活環境が大きく変化し、親という新たな役割を担うことに伴う様々な変化の起きる時期である（小野寺，2003）と同時に、初産婦については経産婦以上に夫の親密なサポートをより必要とする（岩田2003）との指摘があるように、妊娠期の初産婦の家庭生活はライフステージの中でも相対的に不安定な状況の中での生活が進行している。したがって、この時期の妻への精神的サポートとそれに基づく夫婦関係のあり方はその後の夫婦関係にも影響を与えうることは十分考えられる。

本研究では、妊産婦の夫婦関係とストレスの状況を検討するために、夫のワーク・ライフ・バランスと妻である妊婦の出産経験、就労状況をベースに分析を進めた。しかし、妊婦の生活から見て、夫との共同の生活を営んでいることや、妊婦としての心身の不安定な状況を軸として見た場合、夫のワーク・ライフ・バランスの状況が妊婦の生活全般に影響を及ぼす度合いが大きいと考えられるので、夫のワーク・ライフ・バランスの状況を基盤とした分析を継続していく必要があると考える。そのためにデータを増やし、より詳細な分析を継続して行く必要がある。また、同様に、妊娠期の家庭については、妻の就労も含めた分析を行うにあたり、経産婦の子どものストレスも対象として扱う必要があるが、同様にデータを増やして分析を継続したいと考える。

## 引用文献

- 阿南あゆみ・椎葉美千代・柴田栄治・川本利恵子 2010 妊娠中の労働による健康影響と心理的ストレス 産業医科大学雑誌, 32(4), 367-374.
- 青木聡子・岩立京子 2005 幼児を持つ父親の育児参加を促す要因：父母比較による検討 東京学芸大学紀要第1部門, 56, 79-85.
- Belsky, J., Crinc, K., & Gable, S. 1995 The determinants of coparenting in families with toddler boys: Spousal Differences and daily Hassles. *Child Development*, 66, 629-642.
- Darcy, C. & McCarthy. 2007 Work-family conflict: An exploration of the differential effects of a dependent child's age on working parents. *Journal of European Industrial Training*, Vol. 31, No. 7, 530-549.
- 林奈那・岡本祐子 2005 青年の家族に対する関与と家族アイデンティティ発達の関連 家族心理学研究, 19, 13-29.
- 平山順子・秋山泰子 2004 夫婦の職業生活とコミュニケーション 家族心理学年報, 22, 53-66.
- Innstrand, S.T., Langballe, E., Espenes, G.A., Falkum, E., & Aasland, O.G. 2008 Positive and Longitudinal study of reciprocal relations. *Work & Strees*, vol. 22, No1, 1-15.
- 伊藤久美子 2003 就労妊婦の健康問題と研究課題 北海道大学大学院教育学研究家紀要, 88, 291-301.
- 岩田銀子 2003 妊婦の不安に対するソーシャルサポートの効果－夫・家族・助産師のサポートを中心として－ 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 88, 151-158.
- 金井篤子 2006 ワーク・ファミリー・コンフリクトの視点からのワーク・ライフ・バランス考察 季刊家計経済研究, 71, 29-35.
- 金井篤子 1993 働く女性のキャリア・ストレスに関する研究 社会心理学研究, 8(1), 21-32.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達適視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 加藤邦子 2005 男性における仕事と育児の両立要因－充実感を持つためのモデルの検討－ 家庭教育研究所紀要, 26, 110-127.
- Kitzmann, K.M. 2000 Effects of marital conflict on subsequent triadic family interactions and parenting. *Developmental Psychology*, 36, 3-13.
- Lieberman, M., Doyle, A.B., & Markiewicz, D. 1999 Developmental patterns in security of attachment to mother and father in late childhood and early adolescence: Associations with peer relations. *Child Development*, 70, 202-213.
- 三澤寿美・片岡千鶴・小松良子・藤沢洋子 2004 母性発達課題に関する研究（第2報）－妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちに影響を及ぼす要因－ 山形保健医療研究, 7, 9-21.
- 諸井克美 1997 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の公平性－女子青年の場合－ 家族心理学研究, 11, 2, 69-81.
- 中島久美子・常磐洋子 2008 妊娠期の妻への係わりと夫婦関係に関する研究の現状と課題 群馬保健紀要, 29, 111-119.
- 尾形和男 2010 父親のワーク・ライフ・バランスについての一考察－夫婦関係、家族メンバーの生活、子どものワーク・ライフ・バランス観との関係－愛知教育大学研究報告, 59, 99-106.
- 尾形和男 1995 父親の育児と幼児の社会生活能力－共働き家庭と専業主婦家庭の比較－ 教育心理学研究, 43, 335-342.

- 尾形和男・宮下一博 2000 父親と家族－夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス, 幼児の社会性の発達及び父親自身の成長発達－ 千葉大学教育学部研究紀要, **48**, 1-14.
- 尾形和男・宮下一博・福田佳織 2005 父親の協力的関わりと家族成員の適応－母親役割・妻役割達成感, 子どもの攻撃性, 父親のストレス・コーピングとの関係－ 家族心理学研究, **19**, 31-45.
- 小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, **14**(2), 180-190.
- Robinson, B.W. & Barret, R.L. 1986 *The developing father-emerging roles in contemporay society*. New York: Guilford Press.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, **29**, 348-353.
- Streich, M. L., Casper, W. J., & Salvaggio, A. N. 2008 Can we agree and still conflict? An examination of couples' agreement of work-family conflict. *Journal of Managerial Psychology*, **23**, 252-272.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊介 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連－家族機能および両親の養育態度を媒介として－教育心理学研究, **50**, 129-140.
- 山口一男 2007 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究, **73**, 55-60.
- 渡辺さちや 1989 家族機能と自我同一性地位の関わり－青年期の自我の自立をめぐる－ 家族心理学研究, **2**, 85-89.

## 謝辞

本研究の実施にあたり, 科学研究費(基盤研究(C)(1)課題番号23530661, 研究代表者:尾形和男)を受けた。調査の実施にあたり, 多くのみなさまのご協力を頂いた。これらの方々に心より感謝申し上げます。

(2012年9月10日受理)